

「姦通の女」の事件(ヨハネ 8:1~11)、ヨハネ福音書からの報告を聞けばもうそれだけで十分な気がする。場面の奥底にまだ何やらかがあるのだろうか。

「姦通の女」の記述については、過剰な読み込みは無用だと思う。その場をじっと見つめていると、一人ひとり、自分で何かを感じざるだろう。それが最良ではないか。

だから私は、場が鮮やかに現れ、細部までが喚起されるよう、少しだけ手助けをしたい。

早朝の神殿の中庭、イエスは車座になって民衆を教えている(8:2)。淡々とした教えの場に、ドヤドヤと殺気立った一団がやって来た(8:3)。教えの静けさに対して、法の番人の方はいかにも騒々しい。これだけでも何かを際立たせている。

彼らは「こういう女は石で打ち殺せと、モーセは律法(レビ 20:10,申命 22:22)の中で命じている。ところで、あなたはどうかお考えか(ヨハネ 8:5)」とイエスに詰問する。

法解釈の権限は自分たち律法学者のものなのに、なぜわざわざ無名ラビのイエスに問うのか。彼らはこれまで、イエスに散々苦々しい思いをさせられている。今度ばかりは死刑に処すべき動かぬ証拠があるので「今までのように赦しでもしたら絶対に潰してやる」と態度とは裏腹、実に剣呑だ。

日も高くなり、騒動で集まった群衆の真ん中に立たされた女は(8:3)、恥辱と恐怖で声も出さず脅えている。

彼らは「イエスを試して、訴える口実を得るために、こう言ったのである。イエスはかがみ込み、指で地面に何か書き始められた(8:6)」。

イエスは、底意ある権威者らを平然と無視し、その静けさは一貫して変わらない。かといって、脅える女を助けるわけでも守るわけでもない。すると権威者らはいよいよ目を血走らせて「しつこく問い続ける(8:7)」。ここで二者のコントラストは頂点に達する。

「イエスは身を起こして言われた。[あなたたちの中で罪を犯したことの無い者が、まず、この女に石を投げなさい] (8:7)。イエスの言葉によって、あたり一帯すべてが沈黙した。

人々の口はぽかんと開き、目の焦点は合わず、思考や感情が停止する。いきり立っていた律法学者やファリサイ人ばかりではない。騒ぎがおもしろくて集まった野次馬も、早朝から教えを聞いていた民衆も、沈黙の淵に落とされた。

質問に答えているとは言えないイエスの言葉が何を引き起こしたのか。説明は不要だ。沸騰する陰悪さをヒヤリと凍らせる沈黙。このヒヤリ感、私たちにも想像できるのではないか。

この底知れぬ沈黙は、どのくらい続いただろうか。実際には数秒なのかもしれないが、途方もなく長く感じられる。

「これを聞いた者は、年長者から始まって、一人また一人と、立ち去ってしまい、イエスひとりと、真ん中にいた女が残った(8:9)」。陥れようと画策した憎悪まで消失し、どん底に落とされた女はイエスとだけ向かい合う(8:10~11)。何と印象的な光景だろう。

イエスは静かな声で女に告げる。「わたしもあなたを罪に定めない。行きなさい。これからは、もう罪を犯してはならない(8:11)」。

「聖霊が吹く」とはこういうことではないのか。人々はことごとく沈黙し、場は転換する。「御業がどんなに驚くべきものか、わたしの魂はよく知っている(詩編 139:14)」。キリストの愛と赦しが、人間の魂と響き合う、驚くべき沈黙であった。私を造り、この魂を与えて下さった神に感謝(139:14)。



《おまけのひとつ》

聖霊は炎のごとく燃え立つだけではない 沸騰する場に冷水を浴びせるごとく働かれることもある
痛みを引き起こす愛の言葉が私に風穴を開け 魂にまで聖霊が吹き込む 悪の魂は大きく振幅する